

出張は苦手だ。知らない土地で、知らないホテルに一人で泊まる。

それだけのことが、いつになっても慣れない。

入社三年目。同期のみんなはもう出張慣れしていて、終わったあとに「飯うまかった」とか「観光できた」とか言っている。私は毎回、ホテルの部屋で荷物の確認を三回する。

（早くシャワー浴びて寝たい……）

仙台駅から歩いてきたビジネスホテル。チェックインを済ませ、キーカードの入った紙のケースを鞆にしまう。814。そう頭の中で繰り返しながら、八階の廊下を進んだ。

812、813、814。足を止め、カードを取り出す。けれど読み取り部分にかざすより先に、ドアが内側から開いた。

「追加のタオルは、……あ？」

目の前に、腰へタオルを一枚巻いただけの男が立っていた。濡れた黒髪が額に貼りついている。シャワー直後らしく、引き締まった肩や鎖骨のあたりが薄く赤みを帯びていた。骨格が大きい。肩幅も広く、厚い胸板にはうっすらと筋肉の陰影が浮かんでいる。見上げた先で、整った顔がこちらを向いた。

「……高杉、くん」

知っている顔だった。

同期だ。

同じ年に入社して、同じ研修を受けた。その後すぐに部署が分かれて、私は企画部、高杉くんは営業本部。

高杉くんは背が高い。顔がいい。英語も堪能で、クライアント受けもいい。

飲み会では必ず女子社員に囲まれている。仕事以外で話したことはほとんどなくて、同期なのに、住む世界が違っていた。

明日の打ち合わせには営業側の担当として同席す

ると聞いていたけれど、こんなところで、こんな姿で会うとは思わなかった。

「お前の部屋、何号室だ」

高杉くんは、私が握っているキーカードへ目を落とした。

「814……だよ」

「ここ、俺の部屋だけど。ケースを確認してみろ」

慌てて鞆から紙のケースを引っ張り出した。部屋番号の欄を見る。841。

(……逆だ)

頬が一気に熱くなった。

「ごめん、番号、見間違えた……！」

「俺も、頼んだタオルが来たのかと思った。足音が

止まったから」

逃げるように頭を下げたところで、手に持っていたケースを落とした。拾おうとした手が、高杉くんの手に触れる。反射的に引っ込めた私に、彼はケースを差し出しながらにやりと笑った。

「慌てるなって。……明日の資料、持ってるか」

「う、うん。部屋で確認しようと思って……」

「持ってるなら出せ。今ここで、説明の分担を合わせる」

そう言われると、断る理由はなかった。

頷くと、高杉くんは私を部屋へ通し、着替えを持って洗面所へ入った。

ベッドは一台。ダブルだった。

私はそこから目を逸らし、ローテーブルにパソコンを置いた。

そのあと、届いたタオルを高杉くんが受け取り、黒いスウェット姿で隣に座った。資料を一緒に覗き

込む距離が、思ったより近い。仕事の話なのに、相槌を打つたびに横顔へ目がいつってしまう。

ふと視線を感じて顔を上げると、高杉くんがこちらを見ていた。

「……何？」

「別に」

そう答えながらも、高杉くんはすぐには目を逸らさなかった。その視線に耐えきれなくなり、私の方から資料へ目を戻す。けれどそのあとも何度か視線を感じた。

確認が一段落するころには、すっかり夜も更けていた。

「ありがとう。じゃあ、私はそろそろ……」

「戻るのか」

パソコンを閉じかけた手が止まった。